
真・恋姫†無双～董卓軍IF√～

キサラギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双〜董卓軍I F √ ∽

【Nコード】

N2124J

【作者名】

キサラギ

【あらすじ】

真・恋姫†無双やってて、「董卓軍の√あつたら良いのに…」と思いまして書きました。
読んで頂ければ幸いです。

あと、できれば感想をいただけたらなと、思っております。
なお、誹謗・中傷はご勘弁を。

駄文警報発令中

もしも1

管輅曰く、

「この戦乱の世を鎮める為天より平和の使者が流星と共に現れる」と――

Side E i

「…へえ。街ではそんな噂が流行ってるんやなあ。」

「ええ。まあ言っていたのがあの管輅だから信憑性はかなり薄いけどね。」

「管輅？管輅ってあのエセ占い師とか言われてる？」

「そう、その管輅。」

「うわあそれ絶対当たらんやん。」

「霞もそう思う？」

「まあな。」

霞と呼ばれた女性がそう応える。

もう一人の少女も、その応えを予想してたのか、「だよねえ」と応えた。が、少女は想った。

もしも…もしも本当に、『天の御遣い』などというのがあらわれてくれるのなら…

この荒んだ世界を…

苦しむ人々を…

そして、何よりも、大切な…大切な友達を、仲間を救ってほしい、と。

その時、

「ん？なあ詠。」

霞と呼ばれ、詠と呼ばれた少女は顔を上げる。

「どうしたの、霞？」

「いや、こんな真昼間に流れ星が…」

「…アンタねえ。こんな時間から酒なんて呑んでるからそんな幻を——「ちやうつて！ホンマやって、ほら！」——はあ？そんな物一体何処に……へ？」

少女は確かに見た。

真昼間という明るさのなか、一際輝き、『こちらに向かって』落ちてくる『何か』を…

「「……………え？」」

こちらに向かつて…？

「そ、総員退避！」

「早うせい…つて！あかん！間に合わへん！」

「ちよつ嘘でしょ！？」

光で視界が真っ白になり、詠と霞は死を覚悟した。

そして、辺りを完全に光が覆い——

「……………あれ？」

生きてる？でも間違いなく流星が…

ボクがそんな事を考えていると

「…ん、うゝん」

「…！し、霞！？ちよつとしっかりしなさいよ！」

「うゝん…ここは…天国？」

「馬鹿ツ！違うわよ！ほら起きて！」

「いたた…ん？ここつてさっき、うちらがいた…」

「そうよ。どうやら兵達も無事なようね。」

「ほう、そら良かったわあ。なんせ、いきなり星がこっちに向かつて落ちてきよるんやもん、ビックリしたで。」

「まったくだわ。」

「…ところでなあ、詠？」

「ん？どうかしたの霞？」

「いや…そろそろ、どかんとそいつ窒息死すんで？」

「ハア？一体なんのこと？」

「詠。」

「何？」

「自分の足元見てみい。」

「足元？」

霞に言われるがままボクは自分の足元を見た。

そこには、人の頭が… って！？

「キヤアアアア！？」

「おっと… 大丈夫か詠？」

うう… ボクとしたことが、思わず霞に抱き着いてしまった。しかもあんな悲鳴をあげて…

にしてもここが城の外でホントに良かった。月にはこんな情けないところ見られたくないし、ねえなんて絶対からかってくる。華雄と恋は触れて来ないだろうけど、それが逆につらい。霞は…

「~~~~」ニヤニヤ

…手遅れだったようね。

そんな事を考えてた時だった。

「…ん、うゝん」

「「——ッ！！」」

え？なに？起きるの？

「……スー」

…こいつ一発ぶん殴って良いかしら？

「起こしてみるか、詠？」

「…そうね。このままジツとしても事態は変わらないし。」

「よっし！じゃあ詠はうちの後ろに隠れとき！」

「わかったわ。くれぐれも用心を怠らないでね。」

「わかつとるって心配性やなあ詠は。…さてと。」

ユサユサ

「おーい兄ちゃんこんなところで寝とつたら風邪引くで」

side kazuto

…ん？誰だよ、俺の体を揺すってんのは？

…ははーん、さては及川だな？あの野郎人の貴重な睡眠時間を削ろうとはいい度胸だ。そっちがその気ならこっちは徹底無視してやるぜ。

「うーん、こいつ起きひんなあ…しゃあない。」

ザッザッザッ

お、及川の奴諦めた様だな。

…ダダダ

…ん？何だこの音？

「ええ加減に目え覚ませやー！！」

ゲシッ！

「ぐはあ！」

い、今もろに蹴り入れやがったなあ野郎！

「及川、てめえ何すんだよ！」

「ハア？誰やねん、その『おいかわ』って？」

「ハア？！誰ってお前以外にいる訳…え？」

「ん？どうかしたん？」

「…あろう」

「なんや？」

「どちら様でしょうか？」

「はあ…あんなあ、兄ちゃん？人に名前を聞くときはまず自分から名乗るもんやで？」

ごもつとも

「あ、それもそうだね。」

と、俺が名乗ろうとした時だ。

「霞、そいつ大丈夫そう?」

「ん?おお、詠。もう全然問題無いで。今から名前聞き出そうとしてたところや。」

「そう。…で?」

「で?って何が?」

「名前よ、名前!」

「おお、そやったそやった。」

そついうと、関西弁の女性が再び俺の方に向き直り、

「じゃあ兄ちゃん、改めて名前頼むわ。」

「あ、ああ。えつと俺の名前は北郷一刀つていうんだ。よろしく。」

「おお、よろしゅうなあ!んじゃ次はうちの番やね。」

そついうと、関西弁の女性は咳ばらいを一つしてから、

「オホン、では。うちは姓は張、名は遼、字は文遠や。」

「ボクは賈駟、字は文和。」

……………は?

「ごめん、姓名だけでいいからもう一回言ってもらえる?」

「おお、ええで。うちの名は張遼や。んで、こっちの眼鏡かけてんのが賈駟。」

「…ねえ。それはなんかの冗談なの?もしそうならもう少しわかりやすいのにした方が…」

「ハア?アンタなに言うとんねん?」

「いや、だって…ん?」

そこで俺は違和感に気づいた。

「…東京にこんな見渡しの良いところあったか?」

そつ、そこは見渡す限りが陸地だった。

ということとは、ここは日本…少なくとも東京都ではない。

「ねえ。アンタ大丈夫?」

「ん、大丈夫。ところで、ここ何処?」

「ここは洛陽よ。ほら、少し行けば街があるわ。」

「…マジか。」

「さてと、今度はこっちが質問する番やな。」
「ん、どうぞ。」

「ほんならまず一つ目。兄ちゃんの名前やけど、姓が北、名が郷、字が一刀でええんか？」

「いや、姓が北郷で名が一刀。んで、字っていうのは無し」

「字が無いん？なんや、華雄みたいやな。」

そう言つて張遼と名乗った女性は何タケタと笑った。

「まだ終わりじゃないわよ。」

そついうと、今度は賈馱と名乗った眼鏡をかけた少女がこちらに詰め寄つてきた。

「アンタ何者？」

「えつと、聖フランチェスカの二年生だけど」

「なによ、その『せいふらんちえすか』つて。」

「何つて学校だよ」

「がっこう？」

…うゝん、説明した方が良いのかな？

「なあ一刀？」

「ん？」

つてかいきなり呼び捨てつか…

「自分これから行く宛であるん？」

「…無い。」

「これからどうするかは？」

「…決めてない。」

「ふうん。…なあ詠？」

「ん？なに霞？」

「いや、ちよつと相談したい事が…」

ちよいちよいと手招きをして張遼は賈馱と相談してた。

所々で賈馱が、「でも…」とか「だけど…」とか渋つてたけど張遼の「大丈夫やつて」という言葉に渋々納得してた。

「よっしゃ！おーい一刀〜！」

ん？何だろう？

「あんなあ一刀！一刀さえ良かったらうちらと一緒に暮らさへんか？」

「え？良いの？」

特に賈馱が。

「別に良いわよ。アンタ見た感じ悪い奴には見えないし、何より占いが当たったのかも知れないしね。」

「占い？」

「ああその辺はあんまし気にせんでええよ。」

「ふうん？」

「じゃあ、改めて自己紹介ね。ボクの名前は賈文和。真名は詠よ。」

「真名って？」

「真名うちゅうんは大切な人や信頼した仲間ぐらいにしか教えへんとても神聖な名前なんや。例え知ってたとしても、その者が認めた奴やなかったら絶対口にしたらあかん名前や。ああ、ついでにうちの真名は霞や。」

「って事は俺って結構信用されてるって事？」

「まあ、そうなるわな。」

「そっか。じゃあ」

そういつて俺は手を差し出した。

「なによ？その手は」

「握手だよ。これからよろしくって意味で。」

「おお、よろしゅうなあ一刀！」

そういつて俺の手をブンブン振り回す霞
正直凄く痛いです。

「いてて…っと。詠もよろしく。」

「え？！ああ、こ、こちらこそよろしく。」

目の前にいる賈馱、張遼と名乗る少女達。そして、現代とは思えない地名や格好。夢のような現実。これから一刀に待ち受ける事件とは…元の世界には帰れるのか…

——すべては天のみぞ知る——

次回へ続く

もしも1（後書き）

はい、どうも。

二作目です。一作目が終わって無いのに二作目です！…ゴメン、話が浮かばないんだわ。

あと、久々にtinami行ったら…携帯、入れ無いんだわ。つう訳でコピった。『キサラギ』呂布』です。

…名前、統一しときゃ良かったな。

まあ、とにかく次回をお楽しみにいゝ！

もしも2

『洛陽』

そこは、三国の時代において最も美しく繁栄があり、皆が笑顔で暮らせるの都…のはずだった。

「ここが…洛陽？」

「ええ。その通りよ…。」

そんな馬鹿な…

洛陽といえば、三国の時代における大都市じゃないか。

なのに、目の前にはそんな事微塵も感じさせないような光景が広がっていた。

家は焼け爛れ、人々は互いを罵り合い、とてもここが洛陽だとは思えなかった。

「一刀、あんたの言いたい事はうちらにも痛いほどわかる。」

「霞…」

「人々は住家を無くし、重税による困窮に堪え、戦乱の毎日に怯えている。それがおかしい事くらい誰にだってわかってる。」

詠は悔しそうに嘆いた。

「だったら——「でも！——ッ！！」詠は俺の言葉を遮る様に叫んだ。

「でも…どうしようもないのよ…」

唇を強く噛み締め、肩を震わせた詠を見て、俺はしばらく声をかける事が出来なかった。

だけど、そんな感情と共にある事を決意した。

「…なあ、詠？」

「…なによ？」

「詠は、この街の人達を…ひいては、この國の人達を助けたいって思う?」

「そんなの助けたいに決まってるでしょ!」

「霞はどう?」

「阿呆!そんなんうちかて助けたいわ!」

「そつか。」

「なによ、馬鹿にしたければいいじゃない…」

「そんなことしないよ。ただ、本当に助けたいって思うなら、まずは目に見えるところからでいいんじゃないかな?」

そういつて俺は、近くで怪我をしていた人に肩を貸した。

「へえ、ええとこあるやん。」

「……………」

「ん?どうかしたん賈馱っち?」

「ふえ?!い、いやなんでもないわよ!」

「??そうなん?ならええけど…」

「ほ、ほら!ボク達も手伝うよ!」

「お、おう!」

賈馱の異変に気づきながらも、賈馱の指示に従う張遼だった。その時——ッ!—

「ひい!—!」

「た、助けてくれえ!」

「——ッ!」

「まさか…」

「詠!霞!」

「一刀!無事なんか!」

「ああ。だけどこの騒ぎは一体…」

「黄巾党よ」

……………へ?黄巾党?

「ああ一刀?今、黄巾党くらい簡単に倒せると思ったやろ?」

「え？だつて…？」

こつちには『神速の張遼』に、董卓軍にその人ありと謳われた賈文和がいるんだし、負けることなんてまずないだろう。

俺がそのことを二人に伝えたと、

「いや、まあ…ボク達のことを買ってくれるのは嬉しいんだけど…」
頬を少し朱色に染めて詠がどもる。

そんな可愛らしい反応をした詠に少しドキツとしたのは内緒だ。

「やっぱ数の差がありすぎやから…」

数の差つて…

「相手はだいたいどのくらいなんだ？」

まあ黄巾党は、元は農民だし多くても五万くらいかな？

だが…

「三十万よ。」

……………は？

「ごめん、もう一回言ってもらえる？」

「だから、三十万よ、三十万！」

「さ、三十万……ッ!？」

予想してた数の六倍かよ…

「そうよ。でもこつちは頑張つて集めたとしても十五万が限界。それ
れも、怪我人を含めてね。」

つていうと…

「無事な人だけならどのくらい？」

「十二万ちょい位やな。」

うつ…半分にも満たないじゃないか。

「徴兵とかした方がいいんじゃないのか？」

「ボクだつてそうした方が良いのは解つてる。でも…あの娘がそれを許さないのよ。」

「あの娘？あの娘つて——」

誰のこと？そう聞こうとした時、

「助けてえ！」

「オラア！ガキを助けたきや有り金と食い物全部おいてきな！」

「そ、そんなことしたら明日から儼らはどうやって暮らして行けば…」

「ほう…じゃあガキとはおさらばだな！」

そういつて黄巾党は短剣を振りかざした。

「ひい」

そうして刃が子供に当たりそうになったその時！

「待てよ！」

「ああ？」

気づいたら体が勝手に動いてた。

まったく、これであとに退けなくなったな。

「なんだ、てめえは？」

「俺は、通りすがりの者だよ。」

「ああ？その通りすがりの者が俺達になんか用か？」

「とりあえずその娘を放してほしい。」

「ハア？馬鹿かてめえは？大事な人質放すわけが無えだろうが！」

「まあ普通そうだよな。だから、一つ提案。」

「…言ってみろ。」

「その娘の代わりに俺が人質になる。」

「か八かだがあの娘を助ける為だ。」

やるしかない。

「…ヒヤハハハ！こりゃ傑作だぜ。こんな見ず知らずのガキの為に命を捨てようってんだからなあ！」

そう言つて黄巾党は女の子を開放した。

それと入れ代わりに俺が捕まる。途中、女の子がこっちを心配そうに見てきたので、大丈夫という意味で頷いて見せた。

俺が人質になってから四半刻（約30分）程経った。

「オイ！金はまだなのかよ！」

「いや、そろそろだと思っただけ…」

捕まる時に俺はもうひとつ黄巾党に提案した。

それは、『村人に城へ金を取りに行かせる』というものだった。

初めは相手も納得してくれなかったが、俺がここの太主と知り合いだと伝えるとすぐに承諾してくれた。ちなみに、その時俺は近くにいた詠を指名したのだが、これには訳がある。

一つは、直接黄巾党と争ったことがないと思われたから。

そしてもうひとつは詠の軍師としての力を知っていたから。

…尤も、それは小説とかからの知識だが

「クソツ！もう待てねえ！この野郎ぶつ殺してやる！」

げっ！？マジかよ！？

「オイ！俺を殺したらせつかくの大金が…」

「ウツセエ！んなもん後で根こそぎ持ってってやる！」

そう言つて黄巾党は持っていた短剣を振りかざす。

このままじゃ殺られる！でも、一体どうすれば…

俺のそんな葛藤をしてると、

「あばよ、小僧」

ダメだ、殺られる！

俺が死を覚悟した…その時！

「ギヤアアア！」

「た、助けばあ！」

「ツ！？オ、オイ！どうした！何があった！？」

…あれ？俺、生きてる？それに、さっきから黄巾党の様子がおかしい…

「一体何がどうなってんだ？」

俺が考えてる時だった。

「はぁー！ツー！！」ザシュツ！

「ぐはあ！」

ドシュツ！

「ギヤアアア！」

ズシャア！

「ぐえぼあ！」

そんな阿鼻叫喚と共に、俺の周りにいた黄巾党の群れは、物凄い速さで倒されていった。そして、その原因とも言える人物が俺達の前に現れた。

「…貴様がこいつらを指揮している奴か？」

その女性は、静かな殺気を放ちながら、黄巾党の一人に聞いた。ついでにそいつは、さっきまで俺を捕まえてた奴だ。

「だ、だったらなんだってんだ！」

「そうか。ならば話は早い。」

そう言うつと、その女性は、自分の得物を握り直し、そして…

「はぁー！ツッ！」「グサツ！」

「グギヤア！」

一瞬だった。ほんの一瞬で倒した。

この人は何者なんだ？

俺がそんなことを考えていると…

「華雄！華雄やんか！」

そう叫んで走って来たのは霞だった。

「ん？張遼か。」

「おう、久しぶりやなあ。元気しとったか？」

「当たり前だ。貴様も先程の私の戦い振りを見たであろう？」

「ああ…。スマン、あんま見てへんかった。」

「なっ！？…まあ良い。ところで張遼」

「なんや？」

「その小僧は何者なんだ？」

「ん？ああ一刀の事か？」

「かずと？お前はこいつのことを知っているのか？」

「まあな。」

そして、霞はここまでのいきさつを説明した。

俺が流星と共に現れたこと…

俺が管輅の言っていた『天の御遣い』かもしれない事…

そして、俺が詠達の仲間になったこと…

「……。」

華雄と呼ばれた女性はしばらく考えていた。

「なあ、華雄はなんか不満があるん？」

「張遼よ。こいつに二、三質問をしたいんだが。」

「え？質問？」

そう言つて霞は俺の方を見てきた。

「大丈夫だよ。」

霞の代わりに俺が応えると、「そうか」と一言だけいつてきた。

「北郷…だったか？」

「うん。そうだよ、華雄さん。」

「うむ。では北郷。お前、武の心得はあるか？」

「ん、一応。剣道つていうのをやっていたから、それなりには。」

「そうか。では貴様は何のために己が武を振るう？」

「…大切な仲間や、この國の人達を助けるため。それは、只の自己満足でしかないんだろうけど、それでも俺はこの國の人々を助けたいつて本当に思う。」

「…成るほど。では北郷。目を見せてみる。」

言われた通り、俺は華雄に目を合わせた。

「…フツ。確かに良い目をしている。貴様が言っている事は本心なのだろう。」

そう言つと、華雄は手を差し出した。

「我が名は華雄だ。これからよろしく頼むぞ、北郷。」

「ああ！こちらこそよろしく！」

そう言つて俺達は握手を交わした。

「あつ、そうだ！」

「ん？どうしたんや一刀？」

「いや、華雄さえ良かったら真名を教えて欲しいんだけど」

「…スマンがそれはできない。」

「あつ、やっぱり得体の知れない奴には教えられない？」

「いや、そうではない。私には、真名が無いんだ。」

……え？

「真名が無い？」

「ああ。だが私以外にもそういう者は存在する。」

そういう華雄の顔はどこか哀しそうだった。…そうだ！

「…真名ってさあ、俺がつけたりしたらダメなのかなあ。」

「ん？いや、私はこれといって問題無いが…」

「ホントに！良かったあ。じゃあ…刹那っていうのはどうかな？」

「刹那…か。ふむ、悪くない。」

「よっし！ほんなら華雄の真名は刹那に決まりや！」

「よし。それじゃあ華雄の真名も決まった事だし皆で城に向かおう

！」

俺がそう言った瞬間だった。

…ダダダ

「ん？」

「この、馬鹿男ーーーーッ！！」

「ぐはあ！」

い、いきなり飛び蹴りって…

「ちよっと！アンタが危ないから走って来たのにもう殆ど黄巾党いないじゃない！」

「まあまあ、そう怒んなや賈馱っち。」

…ハア」

願わくば、いつか皆が笑って暮らせる日々が来ん事を……

次回に続く……はず

もしも3

「とりあえず、城前に到着つと。」

俺は一人城の前に立っていた。何故一人かと言うと、詠達が街の被害状況の確認及び怪我人の手当てをするため街に残ったからだ。

俺も残って手伝うといったのだが、

「アンタみたいな見ず知らずの人間がいきなり行っても警戒されるだけよ。」

「詠の言う通りだ。それに、そんな怪しい格好をしているんだ。下手をすれば奴らの仲間だと思われるぞ？」

…と、詠と刹那の二人に説得され、渋々納得した。ああ、霞なら残りの黄巾党を潰しにかかってた。

「さてと。いつまでも突っ立ってないで城に入りますか。」

そう言つて城に入ろうとした時――

「オイ！その怪しい格好をしたお前止まれ！」

……………ん？

「俺のこと？」

「当然だ！お前以外に誰がいる！」

俺が兵士の一人とそんな問答をしていると、

「なんだ？」

「どうかしたのか？」

ゾロゾロ…

「げっ…」

やばいな。いつの間にか近くにいた兵士達が集まって来た。よし。こういう時こそ慌てず騒がず冷静に…

「あの、俺は決して怪しい者でっ――」「ヒュンッ！」「――ってうおわ！」

あ、あぶなあ…

「チィ！しくじったか！？」

「俺達も手伝うぜ！」

「げっ！？」

「おお、有り難い。是非頼む。」

「クッ！こうなったら…戦うしかない。」

「さて…」

「相手は六人。」

「武器は短剣が四人と槍が二人か…」

「…イケるな。」

「なにごちゃごちゃ言つてやがる！」

「そう言つて兵士の一人が突っ込んで来たので、俺は咄嗟にその辺に落ちていた短剣を構える。」

「オラアー！」

「まだ…もう少し…あとちょっと…」「今だ！」

「ガキッ！」

「んなつ！？」

「せいっ！やあ！」

「ドスッ！」

「ぐはっ！」

「バタッ…」

「ふう…なんとか勝ったか。でも…」

「あと五人か…厳しいな。」

「俺がそんなことを考えてた時だった。」

「う、嘘だろ…？」

「この中で一番強いあいつが…」

「敗れた、だと？」

「こいつ、そこまで言われる程強かったんだ…」

「お、おい！どうすんだよ！？」

「どうするって言つたって…」

「そんな事決まってるのですぞ！」

…ん？

「ち、陳宮様！」

「まったく、何をやってるんですかお前達！それでも華雄隊、張遼隊の一員ですか！？」

…は？華雄隊に張遼隊？

「ち、ちよつと待った！！」

「「なんだ（です）！？」」

「君達、霞や刹那の知り合いなの？」

「…？霞はともかく、誰なのです、その『せつな』というのは？」

「それは、私の事だ！」

…！この声は！

「刹那！」

「か、華雄！？」

「將軍、御戻りだったのですか？」

「つい先程な。それより、これはなんの騒ぎだ？」

「それは私がお話致します、華雄將軍！」

そうして兵士の一人が刹那に事のいきさつを話した――

「ククツ…そ、そうだったか。それは…フツ…災難だったな。…クハハ！」

「笑い事じゃ無いよまったく。危うく死ぬかと思っただけだからな。」

「ククツ、すまない。そう気を悪くするな。それにしても…。」

「ん？どうかしたの刹那？」

「ん…いや、なんでもない。気にするな。」

「そうか？なら良いんだけど…」

「ああ、心配をかけたな。（まさか私の部隊で随一の実力を持つ者を一撃で倒すとは…）」

俺と刹那が話していると、

「あ、あの…華雄將軍？將軍はそいつを知っておられるのですか？」

「ん？おお、すまない。お前達には言っただけだったな。」

そういつて刹那は俺の肩を掴んで前に出すと、

「こいつの名は、北郷一刀。私たちの新たなる仲間だ。ほら、北郷！お前も自己紹介せぬか！」

バシッ！

「痛ッ！？…あー、北郷一刀です。よろしくお願いしま——「ちょっと待つです！」——す？」

俺が痛みに耐えながら自己紹介をしていると、一人の少女が待ったをかけた。

「ん？君は…？」

俺が女の子に声をかけると、刹那が割って入ってきた。

「不満か？陳宮？」

…へ？この女の子が陳宮？あの呂布の参謀と云われている？

俺がよほど呆けた顔をしていたのだろう。陳宮が不満げに、「…なんです？」

と、聞いてきたので「なんでもない」とだけ返しておいた。

「オホン！話を戻すのです。」

そう言って陳宮は刹那に向き直る。

「華雄。私はこんな得体の知れない奴を仲間にするには反対です。」

「ほう。それは…」

そういうと、刹那はおもむろに後ろを指差した。

「この二人も納得した事でもか？」

「なっ！？」

刹那の後ろ。そこには、自分の得物を担いだ霞と、嫌味な笑顔を浮かべた詠が立っていた。

「詠！霞！お二人は正気なのですか！？こんな奴を仲間にする事になんの利益が——「利ならあるわ。」——なんですと？」

詠の自信ありげな態度に陳宮は驚いていた。

「ねね。アンタ管輅の占いの話し聞いた事ある？」

「管輅の占い？『天の御遣い』がどうのとか言われてる？それがい

「つたいどうしたと……え？」

しばらくして陳宮は、ふと顔をあげ詠に尋ねてきた。

「あの、もしかいつがその……」

「ええ。アンタが考えてるようにこの者こそ、管輅の言っていた『天の御遣い』その人よ！」

「「ええー！ー！？」」

その場にいた全員（詠、霞、刹那を除く）が驚き、そして俺のことをジロジロ見てきた。

「うう……なんか、ハズい。……と、

「……成るほどです。それなら我々にも利があるのです。」

「ならば北郷を仲間にするのに否は無いのだな？」

「むう……し、しかし！——「恋がこの事知ったら喜ぶやろうなあ……」——ッ！！」

そう霞が言った途端、さっきまで渋っていた陳宮が、一時、パァ……！と明るい顔になった。が、俺と目が合った瞬間、

「し、仕方がないのですぞ。我が名は陳宮。字は公台。仲間になるのだから、真名も預けてやるです。我が真名は音々音ですぞ。有り難く受け取るが良いですぞ！」

と、『あくまで仕方なくだぞ！』言った感じで自己紹介をした。

「こちらこそよろしく、音々音。」

こうして音々音の説得に成功し、無事仲間になることを認めてもら

った俺は、詠達とともに洛陽太守董卓にあいにいく。

果たして董卓は、街の人達は、なにより、乱世は一刀を認めるのか…
そして、一刀に襲い掛かる戦乱の日々とは…

——すべては外史と天のみぞ知る——

次回を待て

もしも4

城門での一件のあと俺達は音々音の案内によって、『玉座の間』へと連れられた。

「ここが、『玉座の間』か……ってあれ？詠は？」

さつきまで傍に居たはずなんだけど？

「ああ、詠なら月のところに行つたのです。」

「月？それって、一体——」

誰なんだ。そう続けようとした時。

ゴオオン！ゴオオン！

「——ッ！？」

なんだ！？何かあったのか！？

俺が慌てていると、刹那と霞の二人に無理矢理座らされた。

「お、おい！これは一体——」「シッ！静かにしている！——あ、ああ。」

仕方がないので静かに待つてる事にする。……と、

「洛陽太守、董卓様御な〜り。」

ドオオン！

……成るほど。それでこの騒ぎか。それにしても、この声。どっかで聞いた気が……

そんな事を考えていると、

「あ、えつと、もうお顔を上げてても良いですよ。」

……ん？なんだか場の空気にそぐわない声がしたな？

「ふむ、そうか。」

そう言つて立ち上がる刹那。

「ん〜。やっぱこういうのは形だけでも疲れるもんやなあ。」

「はい、そこ！許されたからって、いきなりダラけてんじゃないわよ——」

そう霞と刹那にツッコむ詠を、

「詠。二人の事は、もう諦めるなのです。」

「ハア…それも、そうね。」

という感じで音々音が慰めてた。

頑張れ詠！負けるな詠！いつかきつと良いことあるさ！

「あ、あのう…あなたは誰ですか？」

「ん？」

声のした方を振り向く。

そこに立っていたのは少しオドオドした、しかしながら決して警戒心を解いてない眼をした可愛らしい少女だった。

…ナデナデ

「ノノノへう〜」

ハッ！俺は一体何を！

「ご、ごめん！つい…ん？」

なんか今背筋に寒気が…

…ダダダ

「月になにしてんのよ！このド変態！」

ゲシッ！

「ぐはあ！」

ドン！ガラガラガツシャーン！！

「おゝい、大丈夫か北郷？」

「おお！結構飛んどるやん！」

「ふむ。なかなかキレの良い飛び蹴りなのです。」

「フンッ！ボクの眼が黒いうちは、月に手を出すなんて、許さないんだから！」

お、お前ら少しは心配してくれてもいいだろう…

「あ、あのう？」

「へ？…あ！えつとさつきはホントに下心とかは無くって！」

俺が必死に先程の事の弁明をしていると

「お怪我はありませんか？」

なんと…ここに天使が一人舞い降りた！

…じゃなくて。

「ああ、うん。大丈夫だよ。」

「本当ですかあ？良かったあ。」

「ありがとう。そういえば、自己紹介がまだだったね。俺は北郷一
刀。君は？」

俺がそう言つと、

「董卓。字は仲穎です。真名は月です。」

「……………え？」

聞き間違いだ！きつとそうだ！

「…ごめん、もう一回言ってもらえるかな？」

「？？はい、いいですよ。」

コクンと、首を傾げながらも、もう一回少女は名乗った。

「私は董卓。字は仲穎。真名は月です。」

「ええ！？」

こんな小さな子が、洛陽太守董卓だつて？

「どうかしたんですか？」

「い、いや。君みたいな子が太守をやってるなんて、凄いなあつて
思つて。」

俺は咄嗟にそんなことを口にした。

…だがその時、場の空気が重くなった。

「……………」

これは音々音& a m p・刹那

「あちゃー」

これは霞。

「クッ…」

これは詠

「……………グスッ」

これは月…つて！

「ゆ、月！？俺なんか気に障ること言っちゃった？」

「い、いえ違ふんです！ただ…」

「ただ？」

「…月」

詠が心配そうに月を見てた。

「大丈夫だよ、詠ちゃん。」

そう言っつて月は俺の方へ向き直り、

「北郷さん。今から話すことは真実ですが信じるかどうかは貴方に任せます。」

「ん、大丈夫、信じるよ。」

「ありがとうございます。実は…」

……………。

……………。

……………。

真面目な話しを要約してしまっって良いのかわからんが、月の話しを要約すると…

月と詠は元々涼州で暮らしていた。

そこにある日、張壤から手紙が届いた。

なんでも、『朝廷の政戦に巻き込まれ苦戦しているから助けてほしい』といったものだったらしい。それを見た月はすぐに張壤のもとへ急行した。

…だが、それは張壤の罠だった。

月達が救援に来たのを知ると、なんと張壤は、この反乱を企てたのは月達だと言い出したのだ。

当然月達は悪人扱いされ、更には、『董卓が洛陽で暴政を働いてる』という根も葉も無い噂を諸巧に広めたのである。

そして――

「…今に至る、と。」

「…はい」

「ふむ。」

頷いて俺は周りを見た。

「……。」

やっぱりみんな悔しそうだな。無理も無い。

「じゃあさ、みんなに解ってもらおうよ！月達が悪いわけじゃ無いって事を！」

「でも、どうやって…」

「うーん、そこなんだよな。」

俺達が考えていると一人の兵士が慌てて入って来た。

「も、申し上げます！」

「どないしたんや！」

「そ、それがここより一里程の村を黄巾党が襲撃！呂布將軍が交戦中ですが数の差が歴然。このままでは村が壊滅してしまいます！」

「なっ！？」

これは…

「…好機だな」

「なっ！？北郷、貴様！」

「いいえ、一刀の言う通りよ。」

詠と一刀がこれを好機と見た訳は…
村を助けに行った呂布の運命は…

——すべては外史と天のみぞ知る——

次回を待て

もしも5

呂布が近くの村を守るため、単騎で黄巾党の大群と交戦していると
の報を聞き、俺達は呂布と村を助けるがため、その村へと急行した

「一方とある村では」

「野郎共！ぶつ殺せ！」

オオオオオオ！

「……うっとうしい」

そう言つて、少女は持っていた戟を振るう。

「……ふん！」

ザシュッ！

「ギャア！」

「ぐはぁ！」

少女が放つ一撃は、黄巾党の群れを容易に打ちのめす。

だが……

「オラオラア！数ではこっちが勝つてんだ！どんどん突っ込めえ！」
オオオオオオ！

確かにその少女は強い。しかし……

やはり、『1対7000』では無理があつた。

「……ふん！」

ザシュッ！

「ゴブア！」

「ゴフ！」

ドシュツ！

「ギャア！」

次々と黄巾党を切り倒して行く少女。

しかし、少女とて人の子、疲れを知らぬ訳ではない。

「ハア……ハア……むん！」

疲れを紛らわすかのように少女は力任せに戟を振るった。

その時――

「……………ッ!？」

少女は気づかなかった。自分の足元に転がっていた人間が、まだ『生きていた』事に…

「ヒヒッ…年貢の納め時だなあ、女？」

「なあ兄貴？こいつ結構良い外見してるし、捕まえて売っちゃわねえ？」

「ああ、そうだな…」

ぐへへ、と不気味な笑いをしながら男達は、少女へと近づいた。

「…クッ」

もうダメだ…。少女が諦めかけた…次の瞬間。

「はぁー！ー！ー！」

ザシュツ！

「おりゃあああ！」

ドシュツ！

「せい！やあ！」

ザシュツ！グサツ！

「ギャア！」

「ぐはあ！」

「ゴブア！」

ドサ、ドサ、ドサ…

「お、オイ！どうした！？何があった！？」

「なに、ただ貴様の仲間が倒されてるだけだ。」

「なっ！？馬鹿いうな！こっちは七千人の大群なんだぞ？！」

「フツ。たかが、黄巾党に我ら董卓軍が負けるはず無かるう！」

「アハハ！そらそうやなあ！」

「うわあ、さすが霞と刹那だな。もう全員片付けたのか。」

「当然だ。私を誰だと思っている。」

「楽勝やったでー！一刀の方は？」

「うーん、恥ずかしながら、量に苦戦した。」

俺がそう言つと、

「お！でも全員倒したんやな！偉いで一刀！」

「まあ、次からはもう少し迅速に倒して欲しいがな。」

「うっ…善処します。」

そんな感じで和んでいると、

「……霞…華雄？」

「おお！恋、助けにきたで！」

「かなりの疲労が見られるな。だが私が来たからにはもう安心だ。」

「刹那が言つても説得力ないなあ？」

「なっ…霞！貴様私の武を愚弄するのか！？」

「…喧嘩、良くない。」

「恋殿の言つ通りなのです！今は目の前の敵に集中してほしいのです！」

「まったく…先が思いやられるわ。」

「むう…それもそうだな。」

「いやあスマン、スマン。」

…刹那はともかく霞は懲りてないな。

「さてと。んじゃ、みんな。そろそろ戦闘再開しないか？敵さんもお待ちかねだし。」

俺がそう提案すると

「ああ、そうだな。」

「よっしゃ！」

「…（コクッ）！」

こうして、俺達は黄巾党と再び刃を交えた

——数刻後——

「ふう…やっと終わったな。」

「ホンマ疲れたで。」

「この程度で疲れるとは…貴様らに武人としての誇りはないのか？」

「いや、武人としての誇りは関係ないのです。」

「音々音の言う通りだな。」

「むう…」

刹那の反応に皆が笑っていると、

チヨン、チヨン

「ん？」

今突かれた気が…

「……………誰？」

ああ、この子か。

「俺の名前は北郷一刀。」

俺は右手を差し出しそして、

「これからよろしく恋！」

笑顔でそう言った。

ついでに、恋は呂布の真名なんだが、戦ってる最中に許可された。

「…／＼／（コクッ）」

向こうも少しはにかんだ笑顔で握り返してくれた。

…そんな彼女にときめいたのは極秘事項だ。

「恋さん、大丈夫ですか？」

月が心配そくに恋のことを見つめる。

と、

「——ッ!?」

「なっ!?!」

「月ちゃん!?!」

上から順に、恋、刹那、霞である。

それにしても、三人の様子が変だな。

霞なんて、なんか、居たらおかしいモノを見たような…

「…どうして?」

不意に恋が月に尋ねた。

多分、どうして月がここにいるのか、という意味だろう、状況的に見て。

「あ、えつと…その…それは、一刀さんが…」

言いながら月がこちらを向いてきた。

「おい、北郷! 本当なのか!?!」

刹那が俺に問い掛ける。

「え? ああ、確かに俺が月を連れ——」「このアホンダラアア!」
ゲシッ!——ぐはあ!」

霞の渾身の右手ストレート! 効果は抜群だ!

「一刀! こんな戦場まがいの村に月ちゃん連れて来て怪我でもしたらどないすんねん!?!」

「いや、霞さん? これには訳が…」

俺が弁解しようとしていると、

「説明しておられなかったのですか、一刀殿?」

音々音が呆れながら尋ねてきた。

「ハア…だから、最初に説明しとけば、ってボクがあれば…」
詠なんてため息混じりの説教だし…

「…説明やて?」

「どういう事だ?」

「……………??」

詠と音々音の登場で三人が冷静さを取り戻した。

「俺達が悪者なんかじゃない事を証明するためだよ。」

俺が三人のに質問に応える。

「諸侯に伝わっている噂は、『董卓が反乱を起こし、洛陽で暴政を働いている』ってモノだ。反乱の方はどうしようもないけど、暴政の方はまだ無実だって証明できると思うんだ。その為に、月には同行してもらった。」

そう。月を同行させて、『董卓軍が全力で近くの村を助けた』という噂を間諜に変装させた斥候に流させる。

策と言えるかは微妙だけど、詠と音々音には許可されたし、問題無い。よな？

「そうだったのか…。」

「…月、悪者じゃなくなる？」

「そうなるように、みんなで頑張るんだ。」

「…なあ一刀？」

「ん？なに霞？」

俺が霞の方に振り向くと、

「ホンマごめん！」

…全力で謝られた。

って、え？

「ちよつ、どうしたんだよ霞！？」

「だって…うち、なんも聞かないで、いきなり殴ったりして…とにかく、ホンマにごめんな！」

そんなスグにでも泣きそうな顔で言われたら、嫌だなんて言えないじゃないか。

…まあ言うつもりなんて元々無いけど

「あ、謝って足りひんのやったら煮るなり焼くなり好きにしておええよ？」

「…わかった。お言葉に甘えさせてもらうから、真っ直ぐ立って。それと、みんなは先に城に戻ってて良いよ？」

「…（コクッ）」

「了解なのです！」

「ふむ。」

「仕方ないわねえ…行こう、月！」

「あ、待ってよ詠ちゃん。」

ザワザワ…

「みんな行ったか。さてと…霞。」

「応ッ！」

「それじゃあいくよ？」

「いつでも来いや！」

そういうと、霞はギョツつと目をつぶった。

俺はそれを見ると右手を上げて――

「うひゃあ!？」

――力いっぱい抱きしめた。

なんか霞が奇声を発した気がするけど、気にしない事にしよう…

「ノノノか、かか一刀!？」

「ん?なに?」

「な、なにつて!?!なんでうちの事抱きしめとんねん!?!殴るんと

ちやうんかい!?!」

「殴る?なんで?」

「なんでつて…だつてうち一刀のこと思いつきり殴ったんやで?!」

「でもそれは月のことを思つてやったことだろ?そんな友達思いの

霞を殴るなんて俺にはできないよ。」

「せやかて――「それに、」――ん?」

霞の言葉を遮るように俺は言った。

「霞は女の子だもん。」

「…はあ?そんなことで?」

「いや、そんな事でつて…充分だと思つけど…」

俺がそういうと、

「プッ…ハハハ!」

「し、霞？」

急に笑い始めた。

それからしばらく経ち、霞の笑いも落ち着いていた。

「ゼエ…ハア…いや笑った、笑った。」

「いや、笑いすぎだから。」

「アハハ、スマン、スマン。」

「まったく…」

「…なあ一刀？」

「ん？」

霞は急に真面目な顔になった。

「一刀は…辛くない？」

「…え？」

「戦ってる時に、不意に一刀の顔が見えたんやけど…そんな時の一刀が、なんや辛そうに見えてな…」

「霞…」

俺は少し考え、そして答えた。

「辛いよ…とても辛い。」

霞は黙って俺の話を聞いている。

「俺の居た世界では戦争は…少なくとも俺の身近では無かった。それが、今は俺の目の前で起こってる…。正直、逃げたいって思うよ。」

「……………」

そう言った途端、霞が哀しそうな顔になった

「…でも」

と、俺は続ける。

「みんなを助けたいから、俺はみんなと戦うよ。例え恐くても…辛くてもね。」

「…後悔してへん？」

「なにを？」

「…こちらに出会ったこと。」

霞は涙目で聞いてきた。

「する訳無いだろ？」

「…ホンマ？」

「こんな事で嘘ついてもしようがないだろ？むしろ…」

「…むしろ？」

俺は霞の方に向き直り、

「みんなに会えて、良かったって思ってるよ。」

「…そっか。」

そう言うとき霞は涙を拭って、ぐっと背伸びをした。

「…カッコ悪いとこ見せてもうたな。」

「そんなことないよ。霞は俺の事を心配してくれたんだろ。だった
らカッコ悪くなんてないよ。」

「…ありがとう、一刀。」

「どういたしまして。じゃ、そろそろ城に帰ろうか。」

「…応ッ！」

こうして俺達は城に帰った。

…と、これで終わればちょっとした美談だったんだが、そうは問屋
が卸さない。

そのあと、城で後処理をしていた、詠と音々音にこっそり絞られた。
さすがに城に着いたのが夜だったからな。心配もかけただろうと言
うわけでみんなにちゃんと謝っておいた。

…まあ結局許してもらえず、俺は残りの仕事の処理、霞は一月の飲
酒禁止となった。

その時の霞の慌てようって言うたら…

…と、なんだかんだで俺はこの世界を楽しんでいた。
俺の知っている三国志の世界と、似ているようで異なる世界を…

これから起こる戦いも知らずに

一刀の行く先に待ち受けるものとは――
月達の運命は――
これから起こる戦いとは――

――すべては外史と天のみぞ知る――

続き、待ってて。

もしも6

「ふう……」

「いい天気ですなあ一刀さん。」

「ホントだなあ月。」

時は昼時。只今俺と月は、庭でのお茶会をやっているところだ。ついでにお茶も茶菓子も月の手作りだ。超うめえ。

「平和だなあ。」

「……………」

……ん？返事が無い。

「月？どうかしたの？」

「……皆さんが、大変な思いをしているのに私たちだけ平和で良いのかなあって思っ……」

「あ……」

バカ、何やってんだよ俺！

少し考えればわかる事じゃないか！

「ごめん。何も考えないで平和だなんて言っ……」

「まったく……今度からはもう少し現状を考えてから発言して欲しいわね。」

うつ……月が詠みたいな話し方に……。

「ボクみたいじゃなくて本人よ！」

……………え？

ハッ！として俺は顔を上げた。そこに居たのは――

――月だった。

「……あれ？月？」

「はい？」

うっん、まさか幻聴なのか？だが確かに声が……

「後ろよ、後ろ！」

「ん？」

言われて振り返る。

そこには、詠が居た

「……」

ああ、この沈黙の正体か？

これはだな、詠の格好が原因なんだ。

その、なんだ。今で言う、『メイド服』だった。

「えっと……その格好は？」

「ああ、これ？」

そう言ってくるりと一回転してみせた。

うん、反則的に似合っている。

「さつき、霞と街に行った時に呉服店で見つけたのよ。ところで……」

「……ん？」

「なにか言う事は？」

……ああ、そういう事か。

「凄く可愛いよ、詠。思わず抱きしめたい衝動にかられる位に。」

とりあえず思った事を素直に口にしてみた。

「——ッ！？／／／」

お、照れた。

「なな、なに变なこと言ってるのよ！？／／／」

「クスッ。良かったね詠ちゃん。」

「か、からかわないでよぉ！」

耳まで真っ赤にした詠が、月に反論するが、そんな顔で怒られても恐くない。

「ああ、もう！月、ボクにもお茶頂戴！」

「クスッ。はいはい。」

おお、軽くあしらわれてる。

——数刻後——

あの後、詠も落ち着いたのか、さつきまでの動揺が嘘の様に茶会を

楽しんでいた。

「でも、ホントに月は料理上手だよなあ。」

「へう。そ、そんなこと、ないですよ。／＼／」

可愛いなあ。

ナデナデ

「へう」

「はい、そこ！イチャつかない！」

そんな感じで楽しんでいた時だった。

「月ちゃん！詠！一刀！」

ん？

「お、霞か。丁度良いところに。今、月の手作りの茶菓子を食べていたんだが、霞もどうだ？」

「お、ホンマ！じゃあ、お言葉に甘え——」「この大馬鹿者がああ」ゲシッ！——ぐはあ！」

霞に刹那のドロップキック炸裂！

クリティカルヒット！！効果は抜群だ！

「……という訳で軍議や……ガクッ。」

「さつさと集まるぞ。」

ズルズルと霞を引きずる刹那についていく。

「霞さん、大丈夫でしょうか？」

「大丈夫でしょ？」

「まああのくらいで倒れるような子じゃないだろう。」

「ああ。ところで詠よ？」

「なに刹那？」

「お前、その格好で軍議に出るつもりか？」

「……ボクは後から向かうからみんなは先に行つて。」

そう言うや否や、脱兎の如く走り去つて行つた詠だった。

「近々諸侯が攻めて来るだつて？」

玉座の間で音々音によって伝えられたのは、なんとも嫌な出来事だった。

「そうですね。戻って来た斥候の話によれば、参加するのは袁紹、曹操、袁術、公孫賛、それと最近出てきた劉備、後は袁術の客将扱いになつてゐる孫策が主なのです。」

音々音がそう言いた時だった…

「孫策だとお！？己え！今すぐに私があゝの世へ送つてくれる！」
刹那が激昂していた。

「ちよつ！落ち着けよ刹那！今は軍議の最中だろ！」

俺がそう言つと、刹那はハツとして、

「す、すまない。私としたことが…」

そう言つて自分の席についた。

「オホンツ！では、作戦ですが…」

音々音が仕切り直して、軍議が再開される――

軍議の結果汜水関、虎牢関に部隊を配置し、籠城戦をすることになった。

割り振りは、

汜 - 霞、刹那、俺

虎 - 恋、音々音

待機 - 詠、月

…うん、妥当といえば妥当だな。

「では、これで軍議は終了なのです。」

その言葉を機に皆が席を立った。

…一部を除いて。

「…」

「…どうかしたの、刹那？」

「ん、北郷か…いやなに。昔の事を思い出してな…」

「…さっきのことと何か関係があるのか？」

「…まあな。」

「刹那…話してくれないか？勿論無理にとは言わない。でも俺はできる限りみんなの力になりたいんだ！」

「北郷…」

「だから、頼む…」

数分程頭を下げていた。そして――

「…わかった。そこまで言われたら話さない訳にもいくまい。」

そう言つて刹那は俺に話してくれた。

まとめると以下のとおりである。

刹那が昔、荊州にいた孫堅と戦ったこと。

そして、その戦いの最中に刹那の部下が暴走し、結果逃げ帰る嵌めになったこと。

そしてその孫堅の娘こそが――

「孫策なわけか…」

「そういう事だ。」

そう言つて刹那は自嘲気味にフツと笑った。

ビシッ！

「痛ッ！？北郷！貴様いきなりなにを――」
「気にするなよ、そのくらい。」――「え？」

額を押さえ涙目の刹那に俺はそう言つてやった。

ああ、やったのはデコピンだ。

「勝敗は兵家の常だろ？それに、敗戦から得られる物だってあるじゃないか。」

「…例えば？」

「さあ？」

「んなつ！？」

「だって、それは刹那にしかわからない事だと思うから。」

「……………それも、そうだな。」

そう言つて、刹那は立ち上がった。

「どこに行くんだ？」

「鍛練に決まっている。」

お前もどうだ？と誘われたが、遠慮しておいた。

「なあ北郷。」

呼ばれて刹那の方に振り返りながら返事をした。

「どうか……ッ！」

どうかしたのか。そう言うつもりだった。

だが、俺の口は動かせない。何故なら、俺の目の前に、ほぼ零距离で刹那の顔があり、尚且つ、刹那の唇が俺の…

いや、スマンが割愛させて頂く。

しばらく経ち、

「では、私は鍛練に向かう。」

「あ、ああ。」

生返事しかできません。不甲斐ない。不甲斐ないぞ俺！

「ああ、それから北郷。」

「ん？なんだい、刹那？」

よし。良いぞ俺！そのまま、平静を装つて…

「好いているぞ、お前の事。勿論、一人の男として。」

「……………」

「ではな。」

カラン、コロン…

好き？刹那が？俺の事を？一人の男として？

「…ええー？！」

かくして、一刀の周りで新たなる戦いが始まっていった。

諸侯との戦いで待ち受けるものとは――

一刀達の運命は――

そして、一刀を中心に巻き起こる恋の嵐とは――

――すべては外史と天のみぞ知る――

続きを待つが良い

もしも7

ヒュン！ヒュン！ヒュン！

「せい！やあ！たあ！」

諸侯との戦いに備え俺は中庭で鍛練をしていた。

ちなみに、俺が使っている武器は日本刀だ。

倒れていたとき、俺と一緒に発見された物らしい。

「なんで日本刀があったのかはわからないけど…今は素直に有り難いな。」

そう言つて、俺は鍛練に戻った。…と、

「おお、北郷ではないか。」

そう言つて近づいてきたのは…

「や、やあ刹那！！こんなところでどうしたんだい？そうか鍛練か！それなら邪魔をしたら悪いし俺はこの辺で——「ちょっと待て。」

——…はい。」

そう言つて立ち去ろうとした俺の腕を、刹那が掴んだ。

「どうしたんだ、北郷？」

「い、いや、別になんでもないですよ？！」

「嘘を言え。明らかに動揺しているではないか。何か隠しているのか？」

「い、いや、そういうわけじゃ…」

ダメだ。刹那を見るとこの前の事を思い出しちまう。

「熱でもあるのか？顔が朱いぞ。」

刹那が心配そうに聞いてきた。

「いや、ホントに大丈夫だからさ！それじゃあ！」

そう言つて俺は走り去った。

「あ！おい、北郷！…まったく。暇なら街へ行こうと誘いに來たのに…」

その場に残ったのは、少し残念そうにしていた刹那だけだった。

「ハア…刹那には悪いことしたなあ。」

というか、逃げる必要なんてなかったんじゃない…

そんなことを考えていると…

「……一刀？」

ん？今誰か俺の事呼んだ？

そう思い辺りを見回すと…

「こちらですぞ！」

おっと。後ろだったか。

振り返った先に居たのは、

「よっ恋。それから音々音。」

天下の飛將軍呂奉先こと恋と、その参謀陳宮こと音々音である。

「二人で茶会？」

「そうですぞ！」

「…一刀も、食べる？」

そう言つて、恋は肉まんを一つ差し出してきた。

「良いのか？」

俺が聞くと、

「…（コクッ）！」

「もちろんなのですぞ！」

二人とも笑顔でOKしてくれた。

「そっか。じゃあ、そうさせてもらうかな？」

そう言つて俺は近くの椅子に腰掛けた。

ガサッ

「ん？」

今足に何か袋がぶつかった気が…

「ああ、これか。」

どうやら、肉まんが入っていた紙袋が足に当たって倒れたようだ。

直そうと思ってテーブルの下を覗いた。

「…は？」

テーブルの下には、恋と音々音のふとmゲフン！ゲフン！…大量の肉まんが入ってる紙袋があった。

「…二人とも沢山食べるんだね。」

俺がそう言つと、

「違つのです。それは全部恋殿の物ですぞ。」

………は？

「これ全部？」

「…（コクッ）！」

「ホントに？」

「嘘をついてどうするのですぞ？」

…ごもつとも。そう思いながら、お茶を一口。と、

クイツ、クイツ

ん？恋が袖を引っ張ってるけど、どうかしたのかな？

そう思い、お茶を飲みながら振り向き…

「…一刀、あーん」

ブーーーーー！！

噴いた。それはもう盛大に噴いた。

「ゲホッ！ゴホッ！恋さ、ゲホッ！何をいきなり、ゲホッ！ゴホッ！」

ダメだ、むせて上手く喋れない。

「大丈夫ですか、一刀殿？」

音々音が背中を摩りながら、心配そうに聞いてきた。

「ゼエ…ハア…だ、大丈夫。ありがとう音々音。」

そう言つて俺は、音々音の頭を撫でた。

ナデナデ

「うう…子供扱いしないで欲しいのですぞ！」

「おつと、ごめん。」

そう言つて音々音に謝っていると…

ガタッ！

恋が急に立ち上がった。

「どうかしたのですか、恋殿？」

「……………」

音々音の問いかけにも恋は答えない。

そして…

ダッ！

「あ、おい！どこ行くだよ恋！？」

「恋殿！？」

俺達の呼び止めも聞かないで、恋は走り去って行った。

「ったく。音々音。俺は恋を捜して来るから、君はここにいてくれ。」

「

「恋殿が戻って来た場合に備えてですか？」

「そう言う事。それじゃあ！」

ダッ！

そう言っただけはその後にした。

「一刀殿…頼みますですぞ。」

「おかしいな…確かこっちの方に来たはずなんだけど…」

突然走り去って行った恋を追って来たんだが、どうやら見失ったようだ。

「どこ行っただよ恋の奴…」

そう言いながら歩いていると、小さな川についた。

「こんな所に小川があったのか…」

そんなことを言っていた時…

「ヒック…グスッ…」

あれは…恋。

でも、なんで泣いてるんだろう？

「グスッ…一刀、怒ってる…一刀、恋の事嫌いになった。…ヒック

…グスッ…」

そう言っただけは、震えながら泣いていた

「…そんなこと無いよ、恋。」

「…!？」

俺が声をかけると、恋はうずくまったままビクツとした。
とりあえずその隣に俺は腰を下ろした。

「そんなことで、俺が恋のことを嫌いになる訳無いじゃないか。」
俺がそう言つと、

「…ホントに？」

恋が捨てられた仔犬のような目で聞いてきた。

…正直、情欲を持て余す。

「そんなことで嘘つかないよ。それに…」
「…??？」

涙目で恋が首を傾げる。

…やばい!なんだこの小動物的な可愛さは!このままだと俺がどう
にかなつちまう!落ち着け、落ち着けよ俺…

「恋みたいないな可愛い女の子を嫌うはずないよ。」

そう言つた途端――

「…//」

恋が真っ赤になつてた。

…ダメだ!もう抑えられない!

ガバツ!

「…ふぁ」

気づいたら恋の事を思い切り抱きしめてた。

「ご、ごめん!恋が凄く可愛かったからつい…//」

そう言つて離れようとした。…のだが

ギュツ。

「…き。」

ん?

「何か言つた、恋?」

そう聞くと、

「…恋、一刀の事、好き。//」
えつと…?

「それは、仲間として?」

「…（フルフル）!」

凄い勢いで首を横に振ってる。
となると…

「えっと、それじゃあ…もしかして一人の男として?」

そう聞くと、

「（コクコクッ）!」

何度も、何度も頷いていた。

それも、とても真剣な眼差しで。

「…ありがとう、恋。」

そう言つて、俺は恋に微笑んだ。途端、
チュッ。

「んむっ!？」

恋の唇が俺の唇に重なっていた。

「んむ…クチュ…レロ…ちゅ…好き…はむ…一刀…クチュ…好き
…んちゅ…／／／」

真っ赤になりながら素直に自分の気持ちを伝える恋。

そんな姿が可愛いくて

そんな姿が愛おしくて

何があつたかは割愛する。

——数刻後——

「…一刀」

俺に少し寄り掛かりながら、恋が呼んできた。

「なんだい、恋？」

俺が返事をする、

「…恋、一刀好き。一刀のお嫁さんになる。／＼／」

頬を朱く染め、恋が俺に宣言してくれた。チクショウめ、嬉しいじゃないか。

「嬉しいよ、恋。」

そう言つて、俺達はまた唇を重ね合わせた。

…と、これで終われば良い話なのだが、そうは問屋が卸さない。

「ちーんきゅーうキーックー！」

ドガッ！

「ぐはあ！」

城に戻つて一番の出迎えがこれかよ！？

「旦那様、大丈夫？」

ピシッ！

恋が俺の事を呼んだ途端、場の空気が凍り付いた。

「かゝずとと？旦那様つちゅうんはどういうことや？」

「一刀殿おお！」

「このド変態！恋に何したのよ！」

霞さん、詠さん、音々音さん！？とりあえずその不敵な笑顔をやめてください！

「…一刀さんは胸の大きい方がいいのでしょうか？」

「フン…どうせ北郷はなんの取り柄もない私なんかよりも恋の方が

…」

月、刹那！落ち込んでないで助けてください！

「ふああ〜」

ちよつ恋！？どこに行くんだよ？

そんなことを考えていると…
「「「一刀（殿）！！」」」
ヒッ！

戦の前の平和な一コマ。

次回に続くはず…

もしも 8

「さあて、やって来ました汜水関！」

「ん？どうかしたのか、北郷？」

「…いや、なんでもないよ、刹那。」

「…？？そうか？」

という訳で俺達は汜水関に到着した。

「ここ汜水関は両脇を崖に挟まれ、後ろには難攻不落とまで言われ
とる虎牢関。しかもその守将が天下の飛將軍といわれとる呂奉先
とその参謀陳公台。そこでここ汜水関には…」

「…『驍騎校尉』と言われている刹那、『神速の張遼』と謳われて
いる霞の二人の武人がいる、だろ？」

俺が霞の言葉を続けると、霞はチツチツチツと指を振った。

「それだけや無いで一刀。」

「え？他に何かあったか？」

俺がそう言つと、霞と刹那は呆れ気味にため息をついた。

「はあ…あんな、一刀。一刀は今何者なんや？」

「何者つて…ああ、そういう意味か。」

「やっと理解したか。」

そう言つて、やれやれと肩を竦める刹那。

「そ、それよりこれからどうするんだよっ！」

とりあえず話を逸らそうとする俺。

すると、霞と刹那が深刻な顔付きになった。

「まあ基本方針は籠城戦やからなあ…」

「これといつては無い。だが、だからといって鍛練を怠つて良い訳
ではないぞ、北郷？」

「わ、わかつてるつて、それくらい。」

信用ないなあ…

「…ちよつとした冗談のつもりだったんだが、気を悪くしたなら謝

る。」

「いや、いいよ。そのくらいで怒ったりしないから。」

俺がそう言っていると、刹那は柔らかい笑みを浮かべてきた。

「ホントに優しい奴だな、北郷は。」

「女の子に優しくするのは当然だよ。それが刹那みたいに可愛い娘なら尚更ね。」

俺がそう言っていると、

「——ッ！？／＼／＼」

少し驚きながら、頬を赤らめた。

「あ…／＼／」

「ん？なに刹那？」

俺が尋ねると、刹那は可愛らしく微笑んで、

「…ありがとう、一刀。／＼／」

と、照れながら、呼び方を変えて言ってきた。

というか、そんなことされたらときめく訳で…

ときめいちゃうと自制効かない訳で…。

ガバッ！

「ひゃあ？！」

とりあえず抱きしめちゃいました♪

「か、かか一刀！？いきなり何を——「なあ、刹那。」——…ふえ！？」

俺は刹那の目を見て話す。

「あの時は、刹那がいきなりしてきたから…今度は俺からしても良いかな？」

そこまで言っていると、刹那も理解したのか体の力を抜いた。

「一刀…」

「刹那…」

そして、俺の唇が刹那の唇に——

「オホン！ゴホン！」

「「おわっ!?!」」

——重なる前に霞に憚れた…。

「し、霞!?! 貴様いつか——」「いつからもなにもあるかい! 氾水
関入った時からずっとおったわ、ボケエ!」——「…そうだったな。」
やばっ…霞の存在、すっかり忘れてた。

確実に怒られることを予想し、覚悟していた俺と刹那だが…

「ええよ、ええよ…どうせウチみたいな男勝りな奴よりも、他のみ
んなみたいな女らしい娘の方が、一刀だってエエんやろ…」

そう言いながら、霞は隅っこの方で、彼女らしくもなくいじけてい
た。

何て言うか…いじらしいなあ。

そう思い、俺は後ろからそっと霞に近づき
ギョッ

包み込む様に背後から霞を抱きしめた。

「…なんのつもりや。ノノノ」

ぶつきらばうに、でも、頬を少し朱く染めて、霞が聞いてきた。

「んー…なんか霞が可愛いかったから、つい…。」

「なんやねん、それ…でも、まあ、なんちゅうか一刀らしいわ。」

「…??? どういう意味だ?」

「一刀は董卓軍の種馬や、うちゅうことや。」

「…サラッと酷くないか?」

俺がそう言つと、霞は意地の悪い笑みを浮かべて、

「でも事実やろ?」

と言ってきた。

そう言つた。

「うっ…。反論できない。」

「ククッ…けど、そこが一刀のエエところもあるんや。」

「…種馬なのが?」

俺がそう聞くと、霞は首を横に振った。

「そっやない。一刀は、老若男女問わずに、誰にでも手を差し延べ

とる。そこが一刀のエエとこなんや。」

そう言いながら、霞は俺の方に向き直った。

「霞…」

その時の瞳がとても真剣で…

「一刀…」

その少し怯えている表情が儚くて…

そのすべてが愛おしくて…

そうして、俺と霞の唇が徐々に近づき…

「ん、んー！」

「…ッ！？／＼／＼」

…今度は刹那に憚れた。

「なあ、一刀？それは私に見せ付けているのか？」

まったくそんなつもりはないのでその金剛爆斧を何処も見えないところにしててください刹那さん？！

「なんや…やる気が刹那？」

どこから取り出したのか、飛龍裂空刀を構えて霞は刹那を見据えた。
…って！

「ちよつ、二人とも待った！戦の前に味方武将同士が争ったら兵の士気に関わるし、なにより部隊に混乱が——」も、申し上げます！」

——ッ！？

慌てた様子で一人の兵士が俺達のもとに駆け込んできた。

「なんや！」

「何事だ！」

「ヒイツ…！？」

はい、二人とも落ち着いて。兵が怖がつてるから！

「えつと…何かあったの？」

とりあえず、改めて兵に尋ねてみた。

「え？あ、はい！実は…」

駆け込んできた兵の話によると、既に連合軍があと十里程で汜水関に到着するらしい。

「そうか…」

「とうとう来るんやな…」

「ああ…なあ刹那。一つだけ、俺と約束してくれ。」

「…約束だと？」

「うん。なにがあっても…例え、自分の武を侮辱されても、決して野戦に持ち込まない。これを守ってほしいんだ。」

「なに?!」

俺がそう言った途端刹那は驚いていた。

「一刀!貴様は私に自分の武を侮辱されてもなお亀の様に竦っているというのか!？」

「ああ、そうだ。」

そんな俺の返事が不満なのか、刹那は怒りを露にした。

「ふざけるな!そんなこと、私の武人としての誇りが——」「ふざけるのはそっちじゃないか!」——「なっ!?!」

突然語気を荒げた俺に、刹那が一瞬怯んだ。

「確かに自分の武を侮辱されたら、刹那じゃなくても悔しいよ。それが、誇りを持つてることなら尚更だ。でも…命よりも誇りをとるのは間違っていると俺は思うんだ。」

「一刀…だが!」

「パアァン!」

なおも続けようとする刹那に、霞がビンタをかました。

「このド阿保!なにごちゃごちゃぬかしとんねん!アンタが惚れた男が生きる言うてんのやから黙って頷いときやええねん!」

霞の言い分に、反論しようとした刹那だったが…

「それも、そうだな…。」

と、何かふっ切れた様に落ち着いていった。

そして、刹那は俺の方に向き直り、

「一刀。お前との約束、必ず守ってみせる。」
そう言って真剣な瞳で笑った。

「報告！連合軍の汜水関到着まで、残り二里程！」

「わかった、ご苦労様。休んでて。」

「御意！」

タッタッタツ...

「さあて、敵さんのおでましや。」

「フン！連合軍など所詮烏合の衆。我が武で打ち砕いて…と行きたいが、約束したからな。おとなしくしていよう。」

「ありがとう、刹那。でも、まったく攻撃しない訳にもいかないから、城壁に弓兵を集めて攻撃しようと思うんだけど…」

「お、ええんとちゃう。」

「私も否はない。」

「ありがとう。あと油あるかな？あつたら、火矢を放って火攻めができると思うんだけど…」

「んー…でも、火計って敵が混乱した方が効果を発揮するんちゃう？」

「そう。だから…」

——— 所変わって連合軍天幕 ———

今、連合軍は軍議の真つ最中である…のだが。

「……………」

一向に軍議が進まない。

何故なら、この連合軍の総大将を誰がやるか、ということと揉めていた…いや、正確に言つと、総大将は『ほぼ』決まっている。

あとは、その者が自分がやるという明確な意思表示をすれば万事解決なのだが…

その者…袁紹は決して自ら立候補しようとしない。

彼女は待っているのだ。名族である自分こそ、総大将に相応しいと

推薦する者が出ることを…

ならば、周りが推薦すれば良いのでは？

誰しもがそう思うだろう。現にこの場にいる諸侯のほぼ全員も思っている。

では、何故そうしないのか。それは――

――袁紹があまりに無能で、そんな奴を総大将に選んだ責任を誰もとりたくないからである。

その後軍議に劉備が登場（乱入？）し、劉備の発言により袁紹が総大将、発言者である劉備がその責任者となり、軍議は円く（？）収まった。

それと、汜水関戦の作戦だが…

『雄々しく、美しく華麗に突撃』

とのこと。

尤も、諸侯はそれを『各軍、自由にやってよい』という意味だと見たのだが…仕方ないことだろう。
それから、軍の配置だが…

汜水関

(劉)

凸

凸

(公孫)

凸

凸

凸

(曹)

(袁)

(孫)

凸

(袁)

という感じである。

ついでに、真ん中の『袁』が袁紹、後方のが、袁術である。

読者の皆さんは気づいておられると思うが、袁紹の配置がとても中途半端で邪魔である。

かくして、汜水関の戦いが幕を開けた。

一刀達は汜水関を守り抜けるのか――
なにも知らない連合軍に、真実を告げられるのか――
これから待ち受ける出来事とは――

——すべては外史と天のみぞ知る——

次回を待てい！

もしも9

ここは劉備軍本陣。

そこでは、薄い黄色がかった髪をした少女と、鍔の広い帽子を被った少女が策を練っていた。

「どうしよう、朱里ちゃん？」

朱里と呼ばれた少女姓を諸葛、名を亮、字を孔明…彼女こそ、後に『臥龍』と世間に謳われる存在である。

「うゝん…やっぱりどうにかして敵に出て来てもらわないと…雛里ちゃんは？」

雛里と呼ばれた少女姓を鳳、名を統、字を士元…彼女もまた、後に『鳳雛』と世間に謳われる存在である。

「私も同じ。でも、どうやって出て来てもらおう？」

「…そういうえば、汜水関の守将をやってる華雄さんは、自分の武に高い誇りを持つてゐるって聞いたけど。」

「あ、じゃあそこに付け入るのは悪くないかも。」

…という訳で、連合軍（というより蜀）の作戦は、華雄の挑発に決定した。

「…ん？」

「どうかしたの、刹那？」

「いや、連合軍から二部隊出てきてな…。」

「ホンマや…城門でも落とすんか？」

「いや、あの人数じゃ無理だろ。」

そんなことを言い合っていると、その部隊が止まった。

その部隊の旗には、緑を基調とした布に『関』という字と、『趙』という字が書かれていた。

「緑の旗に『関』と『趙』って言う…そうか、関羽と趙雲か！」

「なんや、知つとるんか一刀？」

「ああ。二人ともかなりのやり手だ…」

そんなことを話していた時…

「——敵将華雄よ！！我が名は関羽！」

「そして我が名は趙雲！」

「貴様らに武人としての誇りがあるというのならば神妙に相手をせい！」

「それとも…貴様らの武は、その辺の寡兵にしか通用しないものなのか？ならば仕方あるまい。」

それだけ言つと、関羽と趙雲は引き換えして行つた。

「…あいつら！黙って聞いていれば好き勝手言いおつて！その口すぐに塞いでくれる！」

そう言つて、金剛爆斧を持って出陣しようとする刹那を俺と霞が慌てて止めた。

「アカンて刹那！今出てつたらあいつらの思つツボやで！」

「悔しいのはわかるけどここは堪えてくれ！」

「ぐぬ…うあああ！！！」

そう言つて、刹那は悔しそくに金剛爆斧を振るつた。

——半刻後——

「動かぬな…」

「ああ。恐らく出陣しようとした華雄を張遼が止めたのだろつ。」

そんな会話をしていた関羽と趙雲に、

「でしようね。」

と声をかけた人物。

「ほお…これは孫策殿、いかが致した？」

趙雲の間にその女性…後に『江東の小霸王』と謳われる存在孫策は、苦笑しながら、

「なんか時間かかっているからお手伝いにきたのよ」

「「手伝い？」」

「そつゝまあ見ててよ…」

く 汜水関よりく

「報告！敵部隊より孫策の部隊が突出してきます！」

「「ゲツ！？」」

「なにい？！」

「華雄よ！私が誰だかわかるか！荊州で貴様が大敗を喫した孫文台が娘、孫伯符である！ここまで言われてなおも貴様は亀の様に竈っているのか！それとも、私に敗れることを恐れているのか？そうか、恐れているのか！ならば仕方あるまい。親子二代に敗れたとあってはさぞかし惨めであろうからな！ここは退いてやるとしよう。せいぜい有り難く思えよ、華雄！」

それだけ言つと、孫策は勝ち誇った笑みを浮かべて、劉備軍に戻って行った。

「…己え、孫策！許さん…絶対に許さんぞ！」

とうとう堪え切れなくなつた刹那が激昂して大斧を持ち、今度こそ出陣しようとしていた。

「ちよつ、待ちいや刹那！」

「離せ霞！あいつは…孫策だけは生かしておく訳にはいかんだ！」
そう言つて刹那は、力付くで、その場を突つ切ろうとした。

「刹那の気持ちもわかる。ウチかて刹那の立場やったらすぐにでもぶつ飛ばしたい。」

「ならば離してくれ霞！この身に代えてでも、孫策を——「パシイ
イン！」——え？」

霞の説得を聞かずに出陣しようとする刹那の頬に俺は平手を食らわした。

「か…ずと…？」

突然の出来事に軽く放心状態の刹那。

けど、そんなことはどうだって良い。

「刹那…刹那俺と約束してくれたのに…それを破つちまうのか？」
俺がそう言つと、刹那はハツとした表情をした後、うろたえた。

「ち、ちがつ…そういう訳じゃ…！」

「じゃあ、おとなしくしてくれるか、刹那？」

「…わかつた。おとなしくしていよう。だが、次に何か言われたら…私は自分を抑えられんぞ？」

「ああ、その時は存分に暴れて良いよ？」

「「……………は？」」

俺の答えに、霞と刹那が呆けた。

その時——

「北郷様！兵の配置整いました。」

「ん、ご苦労様。下がって良いよ。」

「御意ッ！」

タッタッタッ…

「お、おい、一刀？今は…」

ん？ああ、そういえば二人には話してなかったな。

「まあ見ててよ。」

そう言つて俺は城壁から連合軍を見下ろした。

「ん？なあ愛紗、孫策殿。何者か城壁に上りでたが…」

「ふむ、確かに。」

「ホントだ。もしかして降参とか？」

「よく来たな、連合軍の凡愚共！しかし、関羽、趙雲、孫策よ！そんな幼稚な作戦しかできぬ程に貴様らは手詰まりなのだろう。いや…そもそも弱小勢力ではない劉備軍や、袁術如きの客将をやっている孫呉など我ら董卓軍の敵ではなかったな！だが、いくら敵で無いとはいえ、やはり裁きが必要である。よって、これより貴様らに裁きを下す！心して受けよ！」

そう言つて俺は、右手を挙げた。…と、

ゴオオン！！

銅羅の音が高らかに鳴り響いた。

瞬間——ッ！

「『『『オオオオ！』『』『』」

両脇の崖を駆け下り董卓軍の将兵が袁紹軍になだれ込んでいた。しかも、向かわせたのは華雄隊、張遼隊の精兵達である。

「なんや、どうなつとるんや？」

「一刀、これは一体……？」

「うん。俺が居た世界の歴史に今みたいな攻め方をした武将が居てそれを真似たんだ。……尤も博打的要素が強かったけど……つと、敵は結構混乱してるな。」

「うむ。火計をやるなら今だろう。」

「いったれ、一刀！」

「ああ！伝令さん！投擲部隊に行動を開始させて！」

「御意ッ！」

タツタツタツ……

「霞、刹那。」

「ん？」

「なんや、一刀？」

「いや、火計が上手くいったら二人とも出陣を——「良いのか!？」

(ええんか!?)「……あ、ああ。」

二人とも凄い張り切っているな……

余程頭にきていたのだろう。

……と。

「投擲準備、完了致しました！」

「よし。投擲部隊、行動開始!!」

そう命じた途端投げられる油瓶の雨霞。当然戦場は油塗れ。

「今だ！全弓兵構え!!」

チャキ!

弓兵が一斉に火矢を構える。

「放てえ——!!」

ヒュン!ヒュン!

ヒュヒュヒュン!

放たれた火矢の火が投擲された油に燃え移った。

そして、目の前に広がる光景。

それは地獄と呼ぶに相応しかった。

「それじゃあ任せたよ霞、刹那！」

「応ッ！任せときゃ！」

「必ずや期待に応えてみせるさ。」

そう言つて二人は出陣した。

地獄と呼べるこの世界のなかに…

かくして、一刀の策（？）により、戦況は確かに一刀達に傾いた。

一刀達はこのまま勝利を収めるのか——
それとも連合軍が阻止をするのか——

——すべては外史と天のみぞ知る——

次回に続く

もしも10（前書き）

今回は超短いですが、その辺はご容赦を…。

もしも10

〔帝都洛陽〕

「報告！華雄、張遼の両將軍が敵と交戦。」

「ちよつ！ボクはそんな指示出してないよ?!」

「え？そうなのですか？」

「そうよ！そんなの基本方針と全ツ然違うじゃない！」

董卓軍の基本方針…それは、こちらからは手を出さずただただ籠城することだった。

「ああ、もう！すぐに汜水関に伝令を——」報告！北郷殿の策略により連合軍が混乱！我が軍が優勢の模様！——へ？」

恐らく、その場に居た全員が驚いたであろう。

なんせ、見た目は一般人。中身も一般人…まあ、要は一般人が考えた策が敵に通用したことが以外だったのだ。

「…わかった。汜水関の部隊には引き続きかず…北郷の指示に従うよう伝えておいて。」

「御意！」

タツタツタツ…

「すごいね、一刀さん。詠ちゃんもそう思うよね？」

嬉々とした月に対して、

「…そうだね、月」

詠はどこか不安げだった。

詠の不安の原因。それは、北郷の存在。

彼の天の知識は、政を行ううえでとても役立っている。

よもや、彼の知識がなければここまでの繁栄はなかったであろう。しかし、それは同時に恐怖の対象でもある。

『もしも、彼が裏切ったら？』

これまで一緒に居た仲間として、そんなことある訳無いと思う。しかし、軍師として、その一抹の不安が拭い切れなかった。そして、

「詠ちゃん……」

そんな親友の苦しみに気付くも、なにもしてやれない自分に苛立つ月が居た。

続く。

もしも11（前書き）

いつも通りの稚文、乱文だ…
クオリティー重視の奴は…あまり推奨は出来ないな…

もしも11

ここは、洛陽への関門の一つ、虎牢関。

完全無欠、難攻不落、七転八倒と言った代名詞がつけられる程の場所だ。

そして、そんな虎牢関の城壁に赤い髪に褐色の肌をした少女が、一人悲しげな眼をして遠く彼方を眺めていた。

その視線の先にある物は、汜水関。

いや、正確に言えば少女が——呂布が見ていたのは汜水関ではなく、そこで戦っている戦友と、少女の半身とも言える最愛の男であった。

「一刀……みんな……」

仲間の安否を心配する呂布。

ちなみに、これは余談だが、呂布の一刀の呼称がいつぞやの『旦那様』から『一刀』に戻っているのは、一刀の切実な願いからである。

…と、そのとき。

「恋殿……!!」

そう言つて、薄緑色の髪をした少女が、トテトテと走り寄ってきた。ちなみに、『恋』は呂布の真名である。

「……ちんきゅ。」

ちんきゅと呼ばれた少女、名を陳宮、字を公台と言い、董卓軍（彼女が言うには呂布軍）の智将である。

「籠城の準備が整いましたですぞ!」

「……わかった。……ちんきゅ、休んでて良い。」

「そ、そんな訳にはいかないのですぞ!!」

「……」

無言＋困り顔で訴えて来る恋に、

「うう……そんな顔しないで欲しいのですぞ……」

陳宮は困っていた。

その時――

「も、申し上げます!」

一人の兵士が慌てた様子で駆け付けて来た。

「そんなに慌ててどうしたのですぞ?」

「はっ! 先程、汜水関を守る北郷様より通達! 多勢に無勢な為、至急、虎牢関より援軍を頼むとのこと!」

「なっ!?! 北郷の奴は何を考えているのです! そんなの無理に決まっ
っているのですぞ!」

兵士の報告に陳宮は異を唱えた。

実はこの虎牢関、守将が呂布と陳宮の二軍だけなのだ。

そんな状況で援軍に行こう物ならば、虎牢関はもぬけの殻である。
普通は陳宮の様に異論を唱えるのだが…

「…行く。」

「……………は?」

彼女の主君、呂奉先は違った。

「…恋、一刀助ける。霞と刹那も助ける。」

彼女の意志は堅かった。

「うう…恋殿お〜」

批難めいた声をあげる陳宮だが、実は半ば諦めていたりするのだっ
た。

「はぁ…恋殿がこうではどうしようもないのですぞ…全軍、これよ
り汜水関へ援軍に向かうのですぞ!」

陳宮の号令で一斉に汜水関へ向かって行った呂布軍――

――それが、自分達の考えている世界でない事も知らずに

一方、当の汜水関はというと……

「はぁー！ー！ー！」

ブンッ！！

「せりゃあああ！」

ヒュン、ヒュン！

「ぎゃあー！！」

「ぐはあー！！」

「助けごぶあー！！」

ドサッ……

華雄、張遼の猛攻と一刀の策略により、連合軍に少しずつだがダメージを与えていた。

「ふんっ、連合軍と言っても、所詮は統率の取れぬ烏合の衆か……」
金剛爆斧を担ぎながら、鼻で笑う華雄。

「せやけど、油断は禁物やで、刹那。」

飛龍烈空刀を構えながら注意する張遼。

ちなみに、『刹那』というのは、言わずもがな華雄の真名である。

「わかつている。しかし、この程度の団結で我らに挑もうとしていたのか、連合軍は？」

刹那が疑問を持つのも無理はない。

劉備、公孫賛の軍は一刀の計略で混乱しており、曹操と孫策の軍は部隊の配置的に、他の軍より負荷が大きかった。

…袁紹と袁術は言わずもがなであろう。

「…もしかして、ウチら相当嘗められとる？」

「もしかしなくともかなり嘗められているな。」

張遼の疑問に、あっさりと肯定する刹那だった。

「さてと…戦況はまずまずかな？」

汜水関の城壁から、俺、北郷一刀は戦場を…いや、地獄を眺めていた。

周りは炎に覆われ、崖からの奇襲により士気が低下。

おまけに、霞、刹那の二人の猛攻。

互いの兵力に差が無ければ一方的な展開だっただろう。と、

「報告！援軍の要請をした呂布將軍、陳宮様の軍が間もなく到着致します！」

「わかった、ご苦労様。下がって良いよ。」

「御意！」

それだけ言って兵士が下がるうとして…

「…あの、北郷様。一つお伺いしても宜しいでしょうか？」

こちらに向き直り、聞いてきた。

「ん、なにかな？」

まあ、大方の予想はついてるけど。

「はっ。何故、先程呂布將軍達に援軍の要請をしたのでしょうか。

それも、こちらが不利なような言い回しで。」

ほら、やっぱり。

「ああ、それは…——「報告！呂布將軍、陳宮様が汜水関に到着致

しました！」——…っと、わかった。ご苦労様。下がって良いよ。」

「御意！」

タッタッタッ…

兵士が走り去ってから数分後…

「…一刀！」

物凄い勢いで恋が駆け寄って来た…って

速い速い速い速い!?

オリンピックの記録っていうか、人の限界をゆうに越えてないか、あれは!

「ちよつ、恋!その勢いは危険だから止まれって!?!」

「……ッ!?!」

キキーンッ!?!

俺に言われてすぐに急ブレーキをかけた恋だが、さすがに勢いを消し切れず…

「あ。」

「うおお!?!」

ドンッ!ガラガラガラガッシャーン!!

そのまま正面衝動してしまった。

「イツツ。…大丈夫、恋?どこか…怪我…は…」

体を持ち上げると、眼の前に恋の顔があった。状況的には、俺が恋を押し倒している格好である。

「あ…ノノノ」

よく見ると恋も顔が少し紅潮していた。

「恋…ノノノ」

だんだんと二人の顔が近づき…

「かず…と…ノノノ」

そして、おたがいの唇と唇が――

「ちゅんきゅんキイクク!?!」

ドガッ!?!

「ぐはあ!?!」

――重なり合うことはなかった。

「どさくさに紛れてなにしてるですか、この変態は!?!」

「いやいや、これはあくまで事故でして?!」

凄い剣幕で迫り来る音々音（陳宮）に必死に弁解する俺。

「そんな言い訳が通じるわけが…まあ、良いですぞ。それよりも、

戦況はどうなっているんですぞ？」

「はっ！それは自分が報告致します！」

納得してない感じで問い掛ける音々音に近くに居た兵士がこれまでの戦況を報告する。

初めの方は音々音も興味深げに聞いていたが、だんだんと訝しむような目つきになり……

「……と、言うわけで北郷様の策略により我らが優勢であります！」

ブツン――

あ、キレた。

「……どこが苦戦しているのですぞ！！というか、これだとねね達の出番は全く無いのですぞ！？」

ごもつとも。

「……一刀、恋達に嘘ついた？」

……恋さん？そんな、不安と批難が入り交じった眼で俺を見ないで下さい。

「いや、俺は嘘は言って無いぞ？」

「……………」

俺の答えに疑問符を浮かべる恋。それから……

「なにを言うのです！現にこうして伝令の報告した内容と一致しないのです！」

異論を申し立てる音々音。

「あのさ、音々音。伝令さんからは、なんて報告を受けたんだい？」

「だから、多勢に無勢だから援軍を寄越せ……え？」

そこまで言って音々音は気がついた。

「『多勢に無勢だ』って言っただけで『苦戦してる』なんて一言も言って無いよね？」

「なっ……そ、そんなの屁理屈で――」「さて、誤解も解けた事だし作戦の説明をするよ。」「……ごまかすなですぞっ！？」

そう言って俺が華麗にスルーしながら説明した策に対し、恋と音々音は肯定してくれた。（音々音は渋々だった）

「ハア…そろそろ雑魚の相手も飽きてきたな…」

「ホンマやなあ…」

溜息まじりに呟く華雄に賛同する張遼。

そこへ…

「…「待て！（待つのだ！）」」

三つの制止の声がかかった。

「…なんや？」

「誰だ、貴様らは？」

「我が名は関羽！！苦しむ民草の為に立ち上がった大徳が矛なり！」

「我が名は趙子龍！叙州が太守、劉玄德が家臣にして、常山の昇り龍である！」

「鈴々の名前は張飛なのだ！燕人張飛とは鈴々のことなのだ！」

「なに？…そうか、先程のは貴様らだったのか。」

「随分と言ってくれたやないの。」

相手の正体が解った途端、戦闘態勢に入る華雄と張遼。

その時――

「…「オオオオ！！」」

ドドドド…

謎の軍勢（何故謎かと言うと、旗がたっていないから。）が敵の後方…つまり、華雄達から見れば、前方から突っ込んで来たのである。

しかも、敵を一撃で仕留めながら。

「お、おい霞！何なんだ、あの軍勢は？！」

「そんなん、ウチが知つとる訳無いやろ！？」

そんな口論をしていると、軍勢の先頭を走っていた人物が、華雄達と関羽達の間割って入るように横切りながら、馬を降りた。

その者の鎧は白銀に煌めいていた――

その美しさは例えようが無く――

己が存在を、ここぞとばかりに主張していた――

突如華雄達の前に現れた謎の軍勢――
果たして、華雄達の運命やいかに――

次回を見るのですぞ

もしも12（前書き）

いや、更新遅くてすみません。
中々、ネタが…

しかも稚文乱文がなあ…
早く上手くなりてえもんだあ。

もしも12

北郷の策略により戦場は業火に包まれ、それを囃し立てる様な華雄、張遼の猛攻で地獄と化していた。

そこに響くのは連合兵の阿鼻叫喚や命乞い、そして、董卓軍の士気高き怒号。

…そんな地獄のような戦場で一際目立つ軍勢があった。

その軍勢は全員が白銀の鎧に身を包んでおり、それを率いる将は連合の兵を一撃で葬りながら、華雄達の前に現れた。

Side Toutaku-gun

何なんだ、あの軍は…？

霞と刹那が先ず思ったのはそれだった。

連合軍の兵達を斬り進んで来たのを考えれば、どう見ても味方だろう。

しかし…

「霞…あんな目立つ部隊、我が軍に居ただろうか？」

「いやあ、流石にあんな部隊おつたら記憶に残るやろっし…せやけど、うちの記憶には無いなあ…」

「そうか…」

そう。どちらも、このような目立つ部隊に心当たりがまるで無いのだ。

そのため、『もしかしたら、新手なのでは？』という考えが浮かびあがってくる。

しかし、ちらりと様子を見れば、関羽達も謎の部隊を警戒した様子で睨んでいた。

「…ふう。こうしていても仕方ないな。」

そう言っただけは、金剛爆斧を右肩に担ぎ上げる。

「…？どないするつもりなんや？」

「なに、簡単なこと…解らないなら聞けば良いのだ。」

「…単純やなあ、刹那は。」

「悪いか。」

「褒めとるんよ。」

「そうは聞こえんがな。」

とりあえず場が和んだ所で視線を謎の軍の将らしき者に向ける。

「おい、貴様ら何者だ？何処の軍の者だ？返答次第では…」

そこまで言つて刹那は金剛爆斧を相手に向けた。

すると、その将らしき者はおもむろに、着けていた兜を外してみせた。

「……………は？」

「……………へ？」

兜の下に隠されていた謎の将の正体は――

「……………霞、刹那…大丈夫？」

――天下の飛將軍、呂奉先こと恋その人だった。

まあ、聡明な読者諸君や、そうでも無い読者諸君も、一刀が恋を喚んだ時点で恐らく読めていただろう。ただ、まあ…

「なっ…恋だと？！お前、虎牢関はどうしたっ？！」

「も、もしかして…恋が居ながら、もう落とされてしもうたんか？！」

…そんなことを露とも知らない霞や刹那は、軽いパニック状態である。

「……………（ふるふる）」

「な、なに？違うのか？」

「…（コクコク）」

「ほんなら、なんで恋が此処におるんや？」

「…喚ばれた。」

「喚ばれただと……？一体、誰が？」

「いや、誰がも何も、そんなん出来んのうちら以外やったら一人しかおらんやん。」

「……それも、そうだな。」

そう言いながら、ちらつと関羽達の方を見る刹那。

……警戒の色が濃くなっているな。それに、そろそろ痺れが切れる頃だろう。

「……二人とも、お喋りは終わりにして構えろ。」

「せやな……うっし！！いつちよ、やったるかあっ！！！」

「……負けない。」

それぞれが己の得物を構え直す。

「では……行くぞっ！！！」

刹那がそう言い終わるや否や、三人は全身全霊を以って眼前の敵を潰さんと駆け出した。

——駒は揃った。

——これから始まるのは、信念を懸けた殺し合い。

——自身の正義のために、ある者は武を振るい眼前の障害を屠るだろう。

ある者は智を働かせ、己が志に仇成す者を惑わせるだろう。

——汜水関の戦いが、幕を開けた。

―― 全ては外史と天のみぞ知る ――

次回へ続くよ

もしも12（後書き）

はい、すみません。

予想通りの展開しか思い付かないで、申し訳ありません。
くそお… ネタが…… ネタがあっ！！

感想お待ちしております。

あっ、誹謗中傷はやめてくだされ。

もしも13（前書き）

はい、遅ればせながら投稿します。

時間带的には、刹那（華雄）達が恋と合流したちょい前くらい…かな。

稚文・乱文注意。

もしも13

Side kazuto

「とりあえずは成功って事で良いかな。」

「…本当に『とりあえず』ですぞ。」

俺の呟きに、やれやれと言った風に返答する音々音。

「それにしても、よくこんな愚策を思いついたなです。」

「サラリと愚策とか言わないでくれませんかねえっ!？」

…いや、別に『これぞ我が秘策!』とかみたいに思ってた訳でも無いんだけどね。

「…そんなこと言ったら、その愚策を二つ返事で受けた恋はどうなるんだよ。」

仕返しとばかりにちよつとジト目で睨んでみる。

「そんなの、恋殿が御仏よりも深い慈悲の心を持っているからに決まってるのですぞ。」

さも、当たり前のように言い切る音々音。ここまで盲目的な忠誠だとは……………ん?まさか。

「……………そうだったのか。」

「……………どうしたですか、急に何かを理解したような目をして?」

「いや…恋愛って、人それぞれだしな。大丈夫、俺は例え音々音が百合趣味でも、ずっと友達——「ちよ、ちよつと待つです!?!?!」

俺が自分の本心を吐露していると、音々音が顔を真っ赤にして、俺の言葉を遮るように叫んでいた。

「どうして、今の流れから、ねねが百合趣味なんて話になるのですっ!?!」

「えっ、違うの?」

「違うですっ!そもそも、これまで一度としてそんな素振りは無か

「つたですぞっ!？」

「いや、恋に対する態度が、それっばいんだけど…」

「なっ、ななあ?!／／／」

「ぼんっ!!」

「おお、耳まで真っ赤だ。」

「しかも心なしか、プルプルと震えながらこっちを睨んで…」

「フウーーーーっ!!」

「…うん。心なしか、なんてレベルじゃなかった。なんかもう、目の前に親の仇でもいるんじゃないかってぐらいに憤怒と警戒心の籠った目で睨んでました。」

「いくら自分に非があるとはいえ、ちょっぴり切ないです。」

「…まあ、ねねとの愉快的漫才はいいとして——「ちっとも愉快じゃないですぞ!」——いいとして!…実際ねねは、この状況どう見る?」

「むう…急に真面目な風になるなです。」

「それが俺クオリティーだからな。」

「??…くお……なんですぞ?」

「特に意味は無いんで気にしないでください。」

「??変なちんくしゃなのです。」

「ちんくしゃ言うなと心の中でツッコミつつ、「それで?」と視線で促す。」

「…とりあえず、今は恋殿の突然の登場に連合軍の士気、統率は確実に乱れています。ですが…それも一時的なもの。すぐに立て直して来るですぞ。」

「やっぱ、そうだよなあ…」

「この時代の人って、咄嗟の対応上手いからなあ…軍師とかなら尚更だ。」

「それで、どうするです?」

「そうだな…」

「城壁から戦場に目を落とす。あちゃー…刹那達、將軍クラスの人達

と一騎打ちしてるよ…

「とりあえず、一度みんなを汜水関に戻そう。それから作戦を練り直そうと思う。」

「ただ、刹那が退いてくれるかどうか…」

「それが妥当なのですよ」

「だね…誰かある…！」

「ザザッ！！」

「はっ、此処に…！」

俺の呼びかけに直ぐさま二人の兵士が駆け付ける。

「よし、そっちの君は今すぐ銅鑼を鳴らしてくれ！撤退用の三回で…！」

「御意…！」

「タッタッタッ…」

「さてと…君にはやってもらいたい事があるんだ。」

「やってもらいたい事…ですか？」

「そつ。なに、難しい事じゃないよ。ただ、刹那…華雄に撤退命令を伝えて来て欲しいんだ。」

「華雄將軍に？…お言葉ですが、一騎打ちをなさっている華雄將軍を撤退させるなど、自分には不可能です。」

「ああ、大丈夫だよ。もし彼女が頭に血が上って撤退しないようなら、今から俺が言う通りに伝えてくれ。」

「…？それは、どのような内容で？」

「ああ、内容は——」

この撤退が吉とでるか凶とでるか——

一刀が刹那に伝える言葉とは――

連合軍との戦いに勝機は見いだせるのか――

次回も楽しみにしてたってや!!

もしも13（後書き）

…なんか、音々音崩れてないか？

大丈夫かなあ…

次回更新は、かなり遅れます。ネタが浮かんでは爆ぜるからです。毎度待たせて申し訳ありませんが、長~~~~い目で見守ってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2124j/>

真・恋姫†無双～董卓軍IF√～

2010年10月10日11時33分発行